

再発見！ 小林徳三郎

心 フルマ
ふくやま美術館

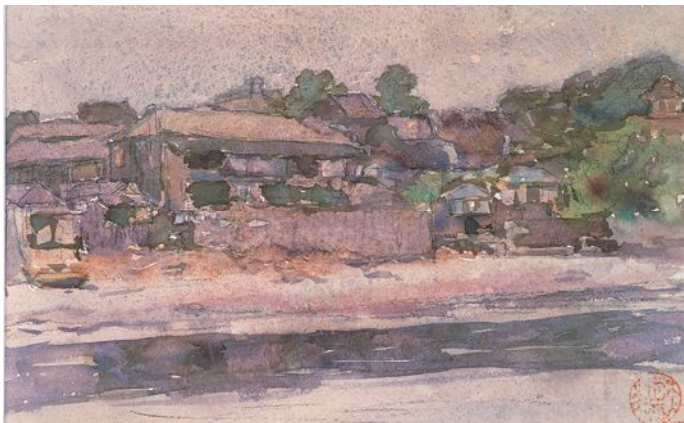
2013年 **12月21** 日(土) — 2014年 **4月6** 日(日) 会場：常設展示室
前期：12月21日(土) — 2月9日(日) 後期：2月11日(火) — 4月6日(日)

※月曜休館 ただし1月13日(月)は開館、1月14日は(火)は休館



8.《花と少年》 1931年

頬杖をつきながら、花を見る少年は何を思うのでしょうか。卓に置かれた黄色いレモン、薄紫の花、深い群青色の壺。彼を取り巻く日常の世界は明るく、色鮮やかな色彩に満ちています。少年の名は輝之助といいました。この幼い息子をモデルにした父・小林徳三郎(1884－1949)の絵は、昭和の初め、新聞に掲載されたり、原色刷り絵葉書として人気を博し一千枚以上を売り尽くしたこともありました。その後、成長した少年・輝之助は東京商科大学(現・一橋大学)に進み、卒業後は鹿島組(現・鹿島建設株式会社)に勤務し、サラリーマンとして、一徹な絵描きであった父を支えました。第二次大戦中には苦境に陥った父のため赴任先の北京からも物資を送り、戦後の混乱期には空襲で家を失った父の為に家を購入して迎え入れます。徳三郎が急逝した後は、母・政子とともにその作品を守り、また父に関する資料を収集し続けました。やがて彼は、作品をまとめて父の郷里であるふくやま美術館、そして広島県立美術館に寄贈することを決断します。本展はその末亡人であるアヤ子氏から昨年度新たにご寄贈を受けたことを機に、これら旧・小林家のコレクションを一堂に集め、画家小林徳三郎の画業を検証しようとするものです。



92.《岸辺の家》1909年 広島県立美術館 前期展示



30.《ダンスホール》1913年頃



96.《観劇》広島県立美術館 前期展示



97.《港の見える風景》
広島県立美術館 前期展示



2.《鯛》1923年



80.《金魚を見る子供》1929年 広島県立美術館 前期展示

小林徳三郎について

◆生い立ち

画家、小林徳三郎のもとの名は藤井嘉太郎といいました。

1884(明治17)年広島県福山市(現・福山市)に生まれた彼は、尾道の商家「島屋」の当主であった独身の伯父の養子となり、その「小林徳三郎」の名を襲名します。しかし、生母が東京で再婚したため、幼くして引取られるかたちで上京し、東京市芝区の私立正則中学校で学びました。同窓生には後の資生堂の初代社長かつ、近代日本を代表する写真家になる福原信三がいました。

◆東京美術学校

逡巡の末、1904(明治37)年に20歳で東京美術学校(現・東京藝術大学)に入学した徳三郎は、その後西洋画科に進み、画家への道を歩みだすことになります。黒田清輝が教授をつとめ、未だに印象派風の画風が全盛であった同校において、徳三郎は才能溢れる友人らとともに真摯に学びました。この頃描かれた水彩画《岸辺の家》(No.92)からは、その若い繊細な感性がよく伝わってきます。けれども次第に気ままでパンカラな画学生を気取るようになった徳三郎は、1909(明治42)年無事に5年の課程を終えて卒業するも卒業式をサボタージュしたのでした。

◆フウザン(ヒュウザン会)

時代が大正に移り変わると、目覚ましい文化的な動向がつつぎと現れてきます。美術界では1912(大正元)年に、高村光太郎、斎藤与里ら進歩的な若い画家たちが「フウザン会」(注：当初は「ヒュウザン会」と称し後に改められた)を結成。官展である文展などではなく、自分達の自由な発表の場を求め、同年には銀座・読売社の3階を借り、第1回目の展覧会を開催します。

徳三郎も第1回展には油彩画や木版画、エッチングなどを、翌年の第2回展にはパステル画などを出展。ゴーギャンやゴッホなど、当時西欧でも最先端であったポスト印象派から色濃く影響を受けた若手芸術家の作品が並んだ展覧会はセンセーションを呼びました。そして徳三郎自身の作品も、作家芥川龍之介が「最も人目をひいたのは小林徳三郎氏の江川一座(二枚あるがその一で見物席をかいたもの)と云う水彩」(1913年12月3日付書簡)と証言するように注目を集めます。またフウザン会を通じて徳三郎は、萬鉄五郎や木村莊八、裕伊之助といった次世代を担う若い画家達と出会い、生涯を貫く篤い友情を結ぶことになります。この頃の作品《ダンスホール》(No.30)や初期水彩画・版画は、以前の画風と打って変わり、木村莊八の評する「ざんぐりとした」「小林好み」の洒落な筆致がよく表れている作品類といえます。

◆芸術座の舞台装飾、書籍装丁

徳三郎にとって大きな実りをもたらしたフウザン会はしかしたった2回の展覧会を開催しただけで翌1913(大正2)年に解散。この年に徳三郎は、会で知り合った斎藤与里や萬鉄五郎とともに、劇作家・島村抱月と女優の松井須磨子らが旗揚げした劇団『芸術座』の舞台装飾の仕事に参加しました。「カチューシャの唄」などの大流行を巻き起こした劇団の最盛期を支え、実は舞台衣装のデザインまでしていたのでした。

同じ時期に島村抱月による翻訳書や、早稲田の英文科の学生らによる同人誌『奇蹟』の装丁も担当。ふくやま美術館所蔵の衣装デザインや、カット原画はその多彩な活動を物語ります。

小林徳三郎年譜

- 1884(明治17)
1月8日 広島県福山町に生まれる。幼名藤井嘉太郎。幼い頃に母方の伯父小林徳三郎の養子となり襲名。再婚した母に引き取られ上京。
- 1896(明治29)
東京市芝区私立正則中学校に入学。福原信三と同窓となる。
- 1901(明治34)
同校を卒業。東京高等工業学校(東京工業大学の前身)に進学し、2年修了後中退。
- 1904(明治37)
東京美術学校に仮入学、この後予備之課程、翌年本科である西洋画科に進む。
- 1909(明治42)
東京美術学校西洋画科を卒業。翌年従姉妹・西阪政子と結婚。その後明治44年に長男・閑之助誕生。
- 1912(明治45/大正元年)
一時大阪帝国新聞社に入社したが、すぐ辞して上京。フウザン会(当初呼称は「ヒュウザン会」で後に改められた)の創立に参加し、第1回展に《風景》《胸》《軽業(木版)》等を出品。 長女・桃子誕生。
- 1913(大正2)
フウザン会第2回展に《江川一座(パステル)》等を出品。劇団『芸術座』の舞台装飾主任となり、大正6年頃まで続けた。
- 1917(大正6)
二男・輝之助誕生。
- 1918(大正7)
東京外国語学校フランス語専修科卒業。第5回院展に《風景》を出品。
- 1919(大正8)
第6回院展に《鰯》を出品。院展には翌年も参加するが、洋画部門の解体により第7回展が最後となる。
- 1922(大正11)
1月春陽会発会。小石川野島康三郎で個展開催(12月2日～4日)。
- 1923(大正12)
5月、春陽会第1回展に《鰯》等を出品。これ以後療養中をのぞき、第26回までほぼ毎回春陽会展には参加。9月1日関東大震災。
- 1924(大正13)
芝区・頌栄高等女学校で美術教育にあたり昭和8年まで継続。
- 1926(大正15/昭和元)
春陽会会員に推挙される。三男・徳弥誕生。
- 1928(昭和3)
資生堂ギャラリーで「小林徳三郎個人展覧会」(10月19日～21日)、油彩小品50点を展出。
- 1933(昭和8)
4月、春陽会第11回展に《花と少年》等を出品するも、結核を患い、福原信三の計らいで千葉・館山病院に入院ののち、同地で静養。
- 1935-36(昭和10-11)
春陽会第13・14回展に不参加。病氣快癒、帰京。
- 1937(昭和12)
春陽会第15回展に復帰。新文展無鑑査となる。
- 1939(昭和14)
この頃より多く江の浦に滞在、制作。
- 1940(昭和15)
5月、銀座の三昧堂で個展開催。
- 1943(昭和18)
銀座の兜屋画廊で「小林徳三郎画伯 油絵優作鑑賞会」(6月12日～16日)を開催。
《河口湖斜陽》《残照》等を出品。
- 1945(昭和20)
5月戦災のため自宅焼失。箱根強羅、福原信三別荘内に疎開。
- 1946(昭和21)
春陽会第23回展に《F君の居間》等を出品。
- 1947(昭和22)
春陽会第24回展に《F夫人》等を出品。
- 1949(昭和24)
前年末、疎開生活を切り上げ帰京し、4月10日から開催された春陽会第26回展に参加するが、4月18日心臓マヒのため自宅で急逝。
- 1950(昭和25)
春陽会第27回展において代表作30点による小林徳三郎遺作室特設。



長男閑之助と徳三郎



昭和18年 妻政子と徳三郎(自宅にて)



福原信三と徳三郎



遺作展会場集った家族。
妻政子、桃子、左・徳弥、右・輝之助
後ろの絵は輝之助がモデルの《子供》(No.3)

(参考文献)
■雑誌等 小林徳三郎:『中学生時代』『アトリエ』(アトリエ社) 2巻2号 1925年2月 / 『頌栄女学校の美術教育』『アトリエ』 4巻2号 1927年2月 / 『フウザン会頃の萬君』『アトリエ』 4巻6号 1927年7月 / 『フウザン会時代』『アトリエ』 5巻5号 1928年5月 / 『萬鐵五郎君の遺作室記録』(一)(二)『アトリエ』 5巻6号8号 1928年6月 / 『今年の事いろいろ』『アトリエ』 8巻12号1931年12月 / 『東京へ帰って』『アトリエ』 14巻1号1937年1月 / 『作画漫筆』『セレクト』 1巻6号 1930年6月 / 『春陽会レギュラー』『美術新論』 5巻6号1930年6月 / 『美術学校生活』(一)～(六)『中央美術』 2巻2-7月号 1916年 / 『青景画家の日記(上)(下)』『中央美術』 2巻5-6月号 1916年 木村荘八:『小林徳三郎』『画論』 23号 1943年7月 / 『小林徳三郎君』『春陽帖』 27 1950年4月 船伊之助:『小林徳三郎の死』『アトリエ』(婦人画報社) 274号 1949年11月 ■展覧会図録 『小林徳三郎画伯 油絵優作鑑賞会』(兜屋画廊 1943年6月) / 『平福百穂、小林徳三郎、三岸好太郎、武井直也:四人の作家』(東京国立近代美術館 1957年7月-8月) / 『異色作家展シリーズ第22回小林徳三郎』(渋谷東横 1961年) ■書籍 『春陽会七〇年史』 春陽会 1994年7月 / 『資生堂ギャラリー七十五年史1991～1994』 資生堂 1995年3月 / 小林徳弥『備後尾道小林一族の譜』(私家本) 2005年

再発見！ 小林徳三郎

特集展示 小林徳三郎 ○【前期】2013年12月21日(土)－2014年2月9日(日) ◎【後期】2月11日(火)－4月6日(日)

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)	前期	後期
1	小林徳三郎	(1884-1949)	自画像	1940年代	油彩, カンヴァスボード	22.5 × 15.5	○	◎
2	小林徳三郎		鯛	1923	油彩, カンヴァス	38.0 × 45.5	○	◎
3	小林徳三郎		子供	1927	油彩, カンヴァス	45.5 × 33.6	○	◎
4	小林徳三郎		裸体(読書)	1928頃	油彩, カンヴァス	46.0 × 54.0		◎
5	小林徳三郎		裸体(仰臥)	1928頃	油彩, カンヴァス	45.0 × 60.5		◎
6	小林徳三郎		裸体(裸の子)	1928頃	油彩, カンヴァス	53.0 × 45.0	○	◎
7	小林徳三郎		初夏の郊外(大崎)	1926	油彩, カンヴァスボード	39.5 × 50.0	○	◎
8	小林徳三郎		花と少年	1931	油彩, カンヴァス	53.1 × 65.0	○	◎
9	小林徳三郎		郊外の雪	1930	油彩, カンヴァス	31.9 × 40.8	○	◎
10	小林徳三郎		河口湖斜陽	1940	油彩, カンヴァス	53.0 × 73.0	○	◎
11	小林徳三郎		残照(江の浦)	1942	油彩, カンヴァス	65.2 × 53.2	○	◎
12	小林徳三郎		郊外の落日	1949	油彩, カンヴァス	36.4 × 34.5	○	◎
13	小林徳三郎		風景	1949	油彩, カンヴァス	45.0 × 60.5	○	◎
14	小林徳三郎		室内のF氏	1945	油彩, カンヴァス	36.5 × 55.0	○	◎
15	小林徳三郎		婦人像		油彩, カンヴァス	65.0 × 53.0	○	◎
16	小林徳三郎		溪流	1947	油彩, カンヴァス	53.3 × 65.2	○	◎
17	小林徳三郎		俎板の野菜	1947	油彩, カンヴァスボード	30.3 × 41.0	○	◎
18	小林徳三郎		静物		油彩, カンヴァス	46.0 × 55.0	○	◎
19	小林徳三郎		お盆の柿	1945	油彩, カンヴァス	30.5 × 48.5		◎
20	小林徳三郎		静物	1946	油彩, カンヴァスボード	22.5 × 15.5		◎
21	小林徳三郎		かに水仙		油彩, カンヴァス	28.4 × 18.0		◎
22	小林徳三郎		漁港風景写生		グワッシュ, 紙	17.0 × 24.5		◎
23	小林徳三郎		児童遊戯図・傘を持つ婦人		墨・グワッシュ, 紙	79.0 × 54.5		◎
24	小林徳三郎		マンドリン		グワッシュ, 紙	32.0 × 22.0	○	
25	小林徳三郎		画学生のいる風景		鉛筆・グワッシュ, 紙	23.8 × 33.3	○	
26	小林徳三郎		少女		グワッシュ, 紙	27.5 × 30.5	○	
27	小林徳三郎		貴婦人と車上の紳士		水彩, 紙	11.5 × 15.6	○	
28	小林徳三郎		アトリエの集い		グワッシュ, 紙	47.0 × 63.5	○	
29	小林徳三郎		アトリエの集い(ストーブ)		グワッシュ, 紙	21.0 × 34.7	○	◎
30	小林徳三郎		ダンスホール	1913頃	グワッシュ, 紙	26.9 × 34.0	○	◎
31	小林徳三郎		増屋商店		グワッシュ, 紙	16.0 × 23.8		◎
32	小林徳三郎		舞台衣裳案		鉛筆・グワッシュ, 紙	19.5 × 22.5		◎
33	小林徳三郎		曲馬団のピエロ		鉛筆・グワッシュ, 紙	19.6 × 27.5		◎
34	小林徳三郎		震災被害者スケッチ (ブルーブラックインク)	1923	水彩, 紙	16.5 × 23.7	○	◎
35	小林徳三郎		震災被害者スケッチ(茶色)	1923	水彩, 紙	14.3 × 18.7		◎
36	小林徳三郎		震災被害者スケッチ(朱色)	1923	水彩, 紙	32.4 × 23.7	○	◎
37	小林徳三郎		室内のF氏画稿	1945	水彩, 紙	25.4 × 34.8		◎
38	小林徳三郎		箱根強羅駅	1945	水彩, 紙	18.3 × 24.5		◎
39	小林徳三郎		溪流	1945	水彩, 紙	15.8 × 21.5		◎
40	小林徳三郎		溪流	1947	パステル, 紙	20.0 × 27.0		◎
41	小林徳三郎		溪流	1947	鉛筆, 紙	20.5 × 27.0		◎
42	小林徳三郎		溪流	1947	紙本着色	22.8 × 32.5		◎
43	小林徳三郎		風景(箱根早春)	1947	鉛筆, 彩色, 紙	25.0 × 33.2		◎
44	小林徳三郎		浴室	1947	鉛筆, 水彩, 紙	33.0 × 18.7		◎
45	小林徳三郎		男性横顔		水彩, 紙	16.2 × 11.9		◎
46	小林徳三郎		カット原画		水彩, 紙	11.6 × 24.4		◎
47	小林徳三郎		カット原画		水彩, 紙	7.4 × 30.4		◎
48	小林徳三郎		装飾文様型紙(灰色)		水彩, 紙	10.3 × 10.4		◎
49	小林徳三郎		装飾文様型紙(紺, 朱色)		水彩, 紙	14.0 × 11.2		◎
50	小林徳三郎		装飾文様型紙(朱色)		水彩, 紙	11.8 × 10.9		◎
51	小林徳三郎		書籍表紙装丁原画		水彩, 紙	24.0 × 33.0		◎
52	小林徳三郎		机上写生(鉛筆など)	1947	色鉛筆, 紙	21.5 × 32.2		◎
53	小林徳三郎		猫		墨, 彩色, 紙	22.5 × 34.0		◎

再発見！ 小林徳三郎

特集展示 小林徳三郎 ○【前期】2013年12月21日(土)－2014年2月9日(日) ◎【後期】2月11日(火)－4月6日(日)

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)	前期	後期
54	小林徳三郎		白萩と亀		墨, 彩色, 紙	25.0 × 52.0		◎
55	小林徳三郎		動物園写生		墨, 紙	63.6 × 43.1		◎
56	小林徳三郎		操人形師		墨, 紙	41.6 × 27.1		◎
57	小林徳三郎		川釣り		墨, 紙	25.0 × 39.7		◎
58	小林徳三郎		もみじ		墨, 彩色, 紙	26.0 × 56.5		◎
59	小林徳三郎		松と月		墨, 紙	26.5 × 44.2		◎
60	小林徳三郎		富士山	1945-47	墨, 彩色, 紙	26.5 × 37.4		◎
61	小林徳三郎		植木屋		墨, 紙	25.0 × 35.0		◎
62	小林徳三郎		ハツ手 (雪)		墨, 彩色, 紙	42.0 × 50.0		◎
63	小林徳三郎		桃		墨, 紙	23.0 × 35.0		◎
64	小林徳三郎		百合		墨, 彩色, 紙	30.5 × 28.5		◎
65	小林徳三郎		ドクダミ		紙本着色	22.7 × 33.0		◎
66	小林徳三郎		白菜と焼物	1940年代	紙本着色	21.5 × 20.5	○	
67	小林徳三郎		海老芋	1940年代	紙本着色	21.4 × 18.1	○	
68	小林徳三郎		鰯	1949	紙本着色	9.8 × 18.0	○	
69	小林徳三郎		鰻	1940年代	紙本着色	10.4 × 22.6	○	
70	小林徳三郎		南瓜	1943	紙本着色	17.5 × 25.7	○	
71	小林徳三郎		桜	1947	紙本着色	26.6 × 17.3	○	
72	小林徳三郎		朝顔図	1940年代	紙本着色	50.0 × 87.0	○	
73	小林徳三郎		亀図	1943	紙本着色	29.0 × 90.0	○	◎
74	小林徳三郎		扇面朝顔図		紙本着色	22.5 × 52.5		◎
75	小林徳三郎		扇面夏草図		紙本着色	23.5 × 52.0		◎
76	小林徳三郎		扇面牡丹図		紙本着色	24.0 × 52.5		◎
77	南薫造 (1883-1950)		震災の街 (参考展示)	1923	油彩, カンヴァス	49.5 × 60.0		◎

特集展示 広島県立美術館所蔵 小林徳三郎作品・資料

78	小林徳三郎		裸婦	1915	油彩, カンヴァス	23.3 × 17.2	○	
79	小林徳三郎		裸児	1928	油彩, カンヴァス	67.0 × 53.0	○	
80	小林徳三郎		金魚を見る子供	1929	油彩, カンヴァス	45.6 × 53.0	○	
81	小林徳三郎		瓢箪	1931	油彩, カンヴァス	45.2 × 52.2	○	
82	小林徳三郎		へちま	1931	油彩, カンヴァス	52.9 × 30.9	○	
83	小林徳三郎		庭の一隅	1936	油彩, カンヴァス	40.9 × 31.7	○	
84	小林徳三郎		江の浦	1940	油彩, カンヴァス	45.6 × 60.8	○	
85	小林徳三郎		黄菊の束	1941	油彩, カンヴァス	37.8 × 45.5	○	
86	小林徳三郎		婦人像		油彩, カンヴァス	53.0 × 45.5	○	
87	小林徳三郎		西瓜	1932	油彩, カンヴァス	45.5 × 53.0	○	
88	小林徳三郎		こども		油彩, カンヴァス	42.5 × 52.5	○	
89	小林徳三郎		部屋居の女	1945	油彩, カンヴァス	53.0 × 34.5	○	
90	小林徳三郎		婦人像	1906	色鉛筆, 紙	30.8 × 24.9	○	～1/19
91	小林徳三郎		港	1909	水彩, 紙	11.6 × 23.2	○	1/21～
92	小林徳三郎		岸边の家	1909	水彩, 紙	14.7 × 23.1	○	～1/19
93	小林徳三郎		バイオリンのけいこ	1915	水彩, 紙	29.2 × 22.2	○	1/21～
94	小林徳三郎		語らう婦人		水彩, 紙	34.7 × 25.6	○	1/21～
95	小林徳三郎		横たわる裸婦		水彩, 墨, 紙	34.3 × 47.5	○	～1/19
96	小林徳三郎		観劇		水彩, 紙	36.3 × 27.2	○	～1/19
97	小林徳三郎		港のみえる風景		紙, 木版	29.8 × 23.1	○	～1/19
98	小林徳三郎		港		紙, 木版	23.1 × 33.0	○	1/21～
99	小林徳三郎		絵日記 (大正6年9月2日～28日)	1917	和紙に墨 8枚	23.1 × 31.8	○	
100	小林徳三郎		絵日記 (大正12年9月1日～)	1923	和紙に墨 4枚		○	
101	小林徳三郎		天徳帳 (スケッチブック)	1945	和紙に墨・彩色・鉛筆 23枚一綴		○	
102	小林徳三郎		江の浦帖 (スケッチブック)	1941頃	和紙に墨・彩色 31枚一綴		○	
103	小林徳三郎		春陽会絵葉書第1回～12回		絵葉書 10枚		○	

日本・ヨーロッパの近現代美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)	*は寄託
104	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩,カンヴァス	33.6×45.7	
105	吉田卓	(1897-1929)	自画像	1919	油彩,カンヴァス	33.0×23.5	
106	南薫造	(1883-1950)	夏	1919	油彩,カンヴァス	116.7×91.0	
107	白瀧幾之助	(1873-1960)	帽子の婦人	1905-10年頃	油彩,カンヴァス	72.3×53.0	
108	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝		油彩,カンヴァス	65.5×80.5	*
109	安井曾太郎	(1888-1955)	手袋	1943-4	油彩,カンヴァス	89.3×72.8	*
110	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩,カンヴァス	90.9×72.7	
111	小磯良平	(1903-1988)	婦人像	1969	油彩,カンヴァス	52.0×44.0	
112	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔		油彩,板	41.0×32.0	
113	高松次郎	(1936-1998)	形(No.1201)	1987	油彩,カンヴァス	218.0×182.0	
114	松本陽子	(1936-)	ペイルシエバの荒野	1990	アクリル,カンヴァス	200.0×200.0	
115	野田弘志	(1936-)	ガラスと骨II	1990	油彩,アクリル下地,カンヴァス		
116	中川直人	(1944-)	アフリカの女王	1982	アクリル,カンヴァス	150.0×178.0	
117	大島祥丘	(1907-1996)	月下遊放	1947年頃	紙本着色	145.0×146.0	
118	池田遥邨	(1895-1988)	林丘寺	1926	絹本着色	146.0×142.0	
119	片山牧羊	(1900-1937)	野狐図		絹本着色	146.0×50.3	
120	金島桂華	(1892-1974)	魚心暖冬	1936	絹本着色	147.7×250.5	
121	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩,カンヴァス	34.5×51.8	安田コレクション
122	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870年頃	油彩,カンヴァス	49.0×72.0	
123	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩,カンヴァス	120.0×87.0	
124	ジャコモ・バッタ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩,カンヴァス	51.0×60.5	
125	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩,カンヴァス	38.4×46.0	安田コレクション
126	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩,パネル	81.0×60.0	*
127	パブロ・ピカソ		りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩,カンヴァス	16.0×22.0	安田コレクション
128	ウンベルト・ボッチォーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩,カンヴァス	58.0×46.0	
129	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	雪のラバン・アジル	1916	油彩,板	50.1×62.5	安田コレクション
130	ソーニャ・ドローネー	(1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩,カンヴァス	100.0×220.0	
131	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩,厚紙	69.5×49.8	
132	メダルド・ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス,石膏	37.0×30.0×17.0	
133	ジョルジュ・ルオー	(1871-1958)	ユビュ王	1939年頃	油彩,カンヴァス	45.5×68.5	安田コレクション
134	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩,カンヴァス	60.0×47.0	
135	ピエロ・マンゾーニ	(1933-1963)	アクローム	1961	小石,カンヴァス	70.0×50.0	
136	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念—銀のヴェネツィア	1961	油彩,ガラス,カンヴァス	60.0×50.0	
137	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩,カンヴァス	80.0×60.0	
138	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩,パステル,紙,カンヴァス	194.0×150.0	
139	ベリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0×80.0×90.0	

和室展示

○【前期】2013年12月21日(土) - 2014年2月9日(日) 【後期】2月11日(火) - 4月6日(日)

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)	*は寄託
【前期】 めでたさ							
140	宙宝宗宇	(1760-1838)	万歳緑毛亀	江戸時代	紙本墨書	96.5×28.6	*
141	八代中村宗哲	(1828-1884)	隅田川都鳥香合	1848	桜材	3.7 × 5.7 × 5.7	*
142			高取茶入 銘宝珠	江戸時代	陶	5.6 × 5.7 × 5.7	*
143	六代楽左入	(1683-1739)	黒樂福寿文字入茶碗	江戸時代	陶	7.4 × 10.4 × 10.4	*
144	楽旦入	(1795-1854)	赤樂茶碗 不二の絵	江戸時代	陶	8.7 × 12.0 × 12.0	*
【後期】 利休忌							
145	宙宝宗宇		利休像画賛	江戸時代	紙本墨画,墨書	92.0×34.5	*
146	八代中村宗哲		隅田川都鳥香合	1848	桜材	3.7 × 5.7 × 5.7	*
147			利休瀬戸茶入 元伯在判	江戸時代	陶	9.0 × 6.3 × 6.3	*
148			斗々屋茶碗 銘深山木	朝鮮王朝時代	陶	6.3 × 12.7 × 12.7	*
149	久田宗全	(1647-1707)	赤茶碗 銘幽楽	江戸時代	陶	8.5 × 8.5 × 8.8	*



15.《婦人像》



14.《室内のF氏》1945年

◆院展と貧窮生活、小魚シリーズ

劇団「芸術座」の舞台装飾主任として多忙な日々を送っていた徳三郎は、やがて画業に専念するためこれを辞します。このため1913(大正2)年に長女・桃子が、1917(大正6)年には冒頭の輝之助が誕生していた小林家は、貧窮状態に陥ったといえます。

しかしながら徳三郎は、1918(大正7)年第5回院展の公募に応募し、初めて《風景》を入選させたことを皮切りに、翌第6回展に《鰯》を、第7回展に《風景》をというように入選を重ねていきます。ゴッホ風の力強い筆致、暗い色彩が目を惹くふくやま美術館の《鯛》(No.2)は、この頃画家が集中して取り組んでいた小魚主題のひとつです。この小魚シリーズの始まりは、小林家が臨時収入により、やっと購入し台所に置いてあった小魚に、徳三郎がモチーフとして目をつけたのだとも伝えられています。

◆春陽会

徳三郎の作品を受け入れていた院展の洋画部門は第7回を最後に解体されますが、この院展の同人小杉放庵らは、これに代わる自由な発表の場を求め、木村荘八、萬鉄五郎などを創立客員に迎え、1922(大正11)年「春陽会」を発会しました。

フウザン会以来、萬と親友となっていた徳三郎は翌年5月に開催された第1回の「春陽会展」からほぼ毎年参加し、以後は在野団体である春陽会展を自らの活動の場としていきます。初期の春陽会展に発表した小魚シリーズは強い印象をあたえ、「イワシの徳三郎」と呼ばれるほどでした。

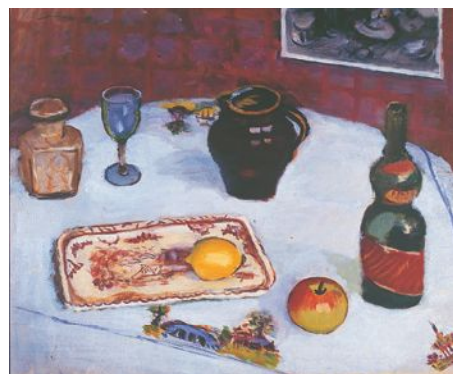
やがて徳三郎の筆致はより穏健なものに移行し、《花と少年》(No.8)、《金魚を見る子供》(No.80)のように、輝之助など子供たちをモデルにした日常風景や、幾何学的な構成画のようにも見える西瓜や瓢箪の静物画、江の浦の風景などを、のびやかに謳いあげていきます。春陽会では、会の支援者の一人であった資生堂の福原信三とも中学以来の再会を果たし、旧交を温めます。福原はその後、第二次大戦の空襲で自宅を失った画家を箱根・強羅の別荘に迎え入れ、彼やその夫人をモデルにした《室内のF氏》(No.15)《婦人像》(No.14)は、この疎開時代に描かれたと考えられます。画面に満ちた明澄な光は、戦時下を感じさせず、騒乱の時代にあっても自身の絵心を保ち続けた徳三郎の「強味」がうかがえます。



81.《瓢箪》1931年 広島県立美術館 前期展示



87.《西瓜》1932年 広島県立美術館 前期展示



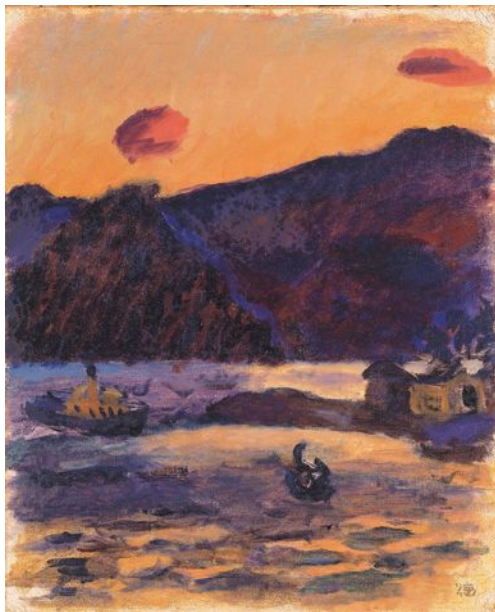
18.《静物》



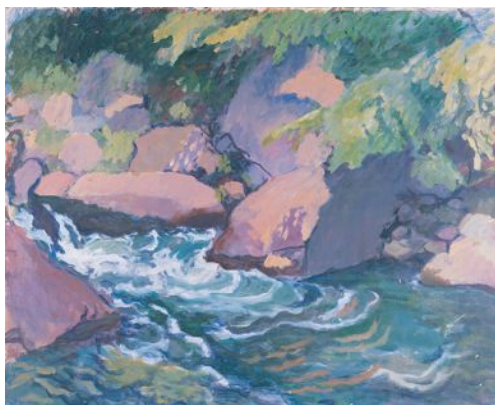
こぼればなし① ～伯父・六代目小林徳三郎の功績～

徳三郎を養子とした伯父の六代目・小林徳三郎(1856-1901)は明治中期に私財を投じて山陽鉄道に直結する糸崎港の開港に尽力した偉人。実は小林家の家業である酒造業「島屋」はこれで財産を失ってしまいます。けれど、明治42年地元有志によって建立され、今も糸崎神社にある「公人・之碑」は、後世に続くその功績を讃えています。

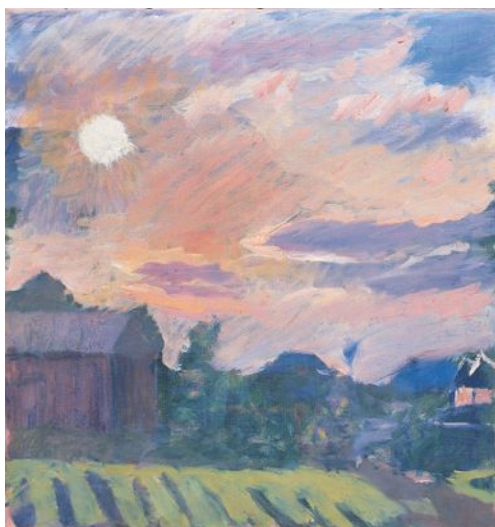
(糸崎神社 広島県三原市糸崎町)



11.《残照(江の浦)》1942年



16.《溪流》1947年



12.《郊外の落日》1949年

◆疎開生活と東京帰還

箱根で疎開生活を送りながらも、徳三郎は周辺に取材した新たな制作も重ねました。繰り返し描いた《溪流》(No.16)は、泡立つ波紋や涼しげな木陰など豊かな強羅の自然が描写されています。望郷の念は募りながらも、戦火で多くの作品とともに家を失っていた徳三郎には帰るあてはなく、息子・輝之助が豊島区千早町の家を購入したことで、東京帰還を果せたのは戦後3年を過ぎた1948(昭和23)年のおわりのことでした。

◆小林徳三郎の死

念願の東京に戻った後、徳三郎はいさんで自宅周辺の風景など描きました。《郊外の落日》(No.12)では、まるでその最後の輝きのように、空を薄紅や紫色に染めながら沈んでいく夕日が描かれています。徳三郎が突然の死を迎えたのはそれから間もない1949(昭和24)年4月。継続して参加してきた春陽会第26回展への搬入を終えたあとのことでした。

儀式には木村荘八ら春陽会の友らが集い、鹿島組の理事長をつとめた鹿島龍蔵からも丁重な弔辞の手紙が寄せられました。実は春陽会設立時の支援者の一人であった龍蔵は、文化人として徳三郎の芸術のよき理解者であり、折にふれ画家を支えてきたのでした。そして、千円という当時破格の香典を手し、葬式に駆けつけたのがフユウザン会以来の旧友、裕伊之助でした。この後、裕は悲嘆のあまり、画壇における徳三郎の死の扱いが小さいことに怒り、その仕事を認めないようなら画壇そのものが間違った方向に向かっているとさえ述べた追悼文「小林徳三郎の死」(『アトリエ』274巻1949年11月)を残しています。

しかし、画家の死は、本当にその芸術の終わりであったのでしょうか？

友人や家族らは、徳三郎の芸術の顕彰のため、その死後もたゆまず努力を続けました。まず裕伊之助は新聞の評論や、展覧会で徳三郎が取り上げられるよう計らい、1957(昭和32)年には東京国立近代美術館で小林徳三郎らの特別展が開催されています(『平福百穂、小林徳三郎、三岸好太郎、武井直也：四人の作家展』)。また木村荘八も作品の発表や保管について丁寧に家族に助言を行いました(昭和32年 小林政子宛木村荘八書簡)。そしてこれらが分かるのは、息子・輝之助が全ての記録を大切に保存していたからこそであり、弟の徳弥も小林家の記録に関し私家本を執筆しました。そして妻・政子と小林家の嫁となったアヤ子氏は毎年虫干しを欠かさずその作品を守り続けてきたのです。

裕伊之助はかつて徳三郎の芸術の事を「素朴ではあるが何かほのぼのとしたものを人の心に伝える。彼の心には小さな燈火のようなものが点っていて、それが世の中の荒い風に吹かれながらゆらゆらと、いつも吹き消されそうでいながら、懸命に絶やさず燃やし続けて来たのである」と評しました。彼を愛する人々によって、ここまで保ちつづけられたこの灯火が、たしかに灯りつづけるかぎり、画家・小林徳三郎の画業はこれ以後も評価され、広く知られることとなると思うのです。

(学芸員 平泉千枝)



《自画像》

こぼればなし② ～天徳堂うた日記～

徳三郎は、結核で千葉・館山で療養した昭和9年頃から「天徳堂」と号して歌をつくりはじめ、日々の記録としていました。

○昭和20年5月 自宅全焼失

やけし絵をくやみ居るよりやけ残る身をしばげまいざかかんぞいまより

○昭和21年 強羅にて

夜の明けを待ち兼ね起きて何をかかんいさと筆とる心すがしく

○昭和24年 東京帰住池袋近郊の家にて

四疊半の窓越しに描く郊外の入日燃つつ沈みたる頃

【編集後記】

ふくやま美術館では2011年の秋季所蔵品展で「小林徳三郎と東京モダン」と題して特集展示をしました。この時、小林徳三郎のご遺族の方々が関東から展覧会を見に訪れ、大変喜んでいただきました。その後さらに、小林アヤ子氏より自画像など11点の作品と印など美術資料3点の寄贈、そして研究資金の提供をいただきました。当館では、こうした新しい資料を基に再び特集展示を企画し、合わせて小林徳三郎研究図録を準備してきました。今回の特集展示では、広島県立美術館のご厚意で26点をお借りし、合計103点を前後期に分けて展示し、会期中に小林徳三郎研究図録を発刊し、全国的美術館などに配布する予定であります。

(学芸課長 谷藤史彦)